

南北アメリカ鏡像史の試み New Comparative Approaches to the History of the Americas

伏見岳志
FUSHIMI Takeshi

はじめに

コロンブスが、もしイングランド国王ヘンリー7世の庇護下で、西方へと航海していたならば、どうなるだろうか。カリブ海やそれに続くメキシコとペルーの征服は、イングランドのひとびとが実現するだろう。メキシコはヌエバ・エスパーニャではなく、ニュー・イングランドと名付けられる。数多くの先住民たちがイングランドの臣民になり、労働力として銀鉱山の採掘に従事することになる。採掘された銀の輸送を統制するためには、ブリストルを唯一の貿易港として指定し、自由な貿易や競争は抑圧されねばならない。この統制により確保された銀収入のおかげで、ヘンリー8世はキリスト教世界随一の富裕な君主になる。獲得された貴金属は、強大な官僚機構を整備することを可能にし、その役職によって貴族層を満足させると同時に、議会の政治的発言権も封じこめるだろう… [Elliott 2009: 262-263]。

「大西洋史——周航」と題された論考のなかで、イギリスにおけるスペイン帝国史研究の泰斗であるジョン・H・エリオットは、上述のようにおよそ要約できる一風変わった考察を展開している。この論考は、英語圏における大西洋史研究の基本書である『ブリテン大西洋世界、1500-1800年 *The British Atlantic World, 1500-1800*』にもともと最終章として収録されていた（第2版ではその後に1章追加されている）。この章で彼に課せられた役割は、同書ではブリテン世界に限定されている大西洋史を、スペイン側との比較の視座から批判的に検討していくことである。そうした一連の比較の作業

のひとつとして、この仮定の考察はなされている。

考察をはじめるとあってエリオットは、こういう「反事実としての歴史」が大西洋史で試みられることはほとんどないが、と前置きをしている。「反事実 counterfactual」あるいは「仮想 virtual」の歴史は、その頃の英米圏で、ニアル・ファーガソンなどが推進していた歴史学の試みであり、エリオットの考察もこの状況を踏まえたものであろう [Ferguson 2000]。

経済史の分野をのぞくと、歴史学において反事実を措定する手法はそれほど評判のよいものではない。にもかかわらず、エリオットが反事実の歴史に果敢に挑戦したのは、彼がこの手法に一定の有効性をみたからであろう。その具体的な例としては、ブリテンの国家形成をめぐる洞察があげられる。植民地の銀という打ち出の小槌がなかったために、ブリテンの君主は自らの権威を強め、官僚機構を整備することができなかった。そして、そのような意図を実現できるだけ財政軍事機構が充実した頃には、議会の力が王権の伸張を抑制できるまで成長していたのである。ただし、銀の有無に関わらず植民地を持つことによって、イングランドのブリテン連合王国のなかでの優位性は確立する。イングランドの新大陸進出がもっと早く、カステイーリャに代わって銀を産出する植民地を持ったらという仮想は、そういった示唆を引き出す発見的な手法として用いられているのである。

エリオットのような反事実の試み自体は、大西洋史では他にあまり例をみない。ただ、AがBであったら、という仮定は、両者を比較する試みといえる。英語圏における大西洋史もしくは南北アメリカ史では、反事実ではないが斬新である比較の手法を導入した研究が、21世紀になって増加している。そういう新たな比較史の潮流を、この小論ではさしあたって「鏡像史」と呼んでみたい。鏡像という表現にはふたつの意味をこめている。ひとつは、ある対を似姿として考える、ということである。これは、従来は違いすぎると思い込んでいたものに、類似性を見いだすことによって、新たな比較の可能性を開いていく研究群を指し示している。鏡像にこめたもうひとつの意味は、鏡に映る姿と比べることで自分を認識することである。こちらには、当時の人々が他地域と自地域を比較する意識を持って行動していたことをあぶり出す、いいかえれば比較意識を歴史化していく研究群が相当する。

そのような鏡像というイメージに依拠しながら、新しい比較史の具体的成果を検討することが、この文章がめざすところである。全体としては、上記のふたつの鏡像史それぞれに相当すると思われる研究の特徴を順番に紹介していく、というスタイルを取っている。したがって、ブックガイドのように読むことも可能だと思う¹。

紹介するにあたっては、ふたつの制限を設けてある。まず、とりあげるのは、主として本、しかも論文集ではなく単著として出版されたものが中心である。*William and Mary Quarterly* や *The Americas* のような大西洋史・汎アメリカ史の関心が高い学術雑誌では、鏡像史的な論文が掲載され、特集が組まれることもあるが、これらは本論文では扱わない。論文集や論文にも言及するのは、あくまでも議論のうえで必要な場合に限っている。

もうひとつの制限は、紹介する本が英語で書かれたものに絞られている点である。ブリテンとスペインの植民地や、その独立後の展開を比較する研究で、スペイン語圏で新しく目につくものは少ない。環大西洋や汎アメリカ的な歴史叙述は、英語圏のプログラムであって、スペイン語圏には存在しないか、あってもポルトガル領を含めたイベリア圏にしか範囲はおよばない。このスペイン語圏での関心の低さの原因を探ることは重要だが、それは本論文では考察しない。あくまでも、英語圏の文献に限る。

南北アメリカという表現には、ひと言が必要であろう。紹介する研究の多くは、大西洋の両側を扱う。したがって、正確には、大西洋史および南北アメリカ史ということになるが、南北アメリカ側に力点があるので、この表現を採用した。

「南北」という区分も問題である。南が南米を意味すれば、北にはメキシコやカリブ地域が含まれることになる。アングロとラテンという区別を採用すると、これが19世紀以降に構築された概念のため、18世紀までの大西洋史研究について相応しい表現でもない。では、ブリテンとスペインにすれば済むかといえば、ブラジルは入らない。そこで、イベリア、イベロという言葉を採用すれば、ハイチはどうするのか…という具合に、どの区分にもあいまいさや欠落がともなう。しかも、各著作で採用している表現も異なる。例えば、ブリテンの代わりにイングランドを採用する論考は多い。この用語の

複雑さ自体が、南北アメリカ史における比較の難しさの一端を表しているように思う。スペインのガリシア地方に出自を持つイギリス人で、合衆国で研究しているフェリペ・フェルナンデス＝アルメストは『アメリカス——ある半球史 *The Americas: A Hemispheric History*』のなかで、アメリカという概念自体が歴史的に伸縮するとともに、ラテンやアングロのような語彙を付加することで複数に分裂してきたことを跡づけている [Fernández-Armesto 2003: 3-20]。つまり、「アメリカ」の範囲や区分自体が歴史的なものであり、研究対象になりうるのだ。しかし、ここでは、その複雑さには踏み込めない。あまり上手い解決策でもないが、これらの表現を厳密に使い分けるのではなく、オーバラップして交換可能な表現として用いることにしたい。

1. 従来と比較史の特徴と課題

近年の鏡像史の検討をはじめる前に、従来の比較史の特徴について確認しておく必要がある。南北アメリカを比較する視線は、はるかに以前から存在する。20世紀に限定してみると、アメリカ合衆国で、ラテンアメリカを念頭においた比較史の主な潮流としては「ボルトン学派」と「南北アメリカ奴隷制比較論争」の2つが挙げられる。前者は、比較の視座を明確に持ちながらも、大きな成果を挙げるができなかった。後者は、奴隷制の総合的で学際的な理解を目指していたが、とりわけ広いインパクトを持ったのが、南北アメリカの比較の視座であった。

まず、ボルトン学派について見ていこう。ボルトン (Herbert Eugene Bolton) は、カルフォルニア大学バークリー校で歴史学科長を長年つとめ、同校のバンクcroft図書館の創設に尽力した人物である。専門は、英領アメリカとスペイン領との境界領域であり、フレデリック・ターナーの影響を受けながらも、フロンティアではなくボーダーランドという概念を提唱し、スペイン領側の社会文化的プレゼンスを考慮した歴史研究を目指した。「ボルトン学派」は彼の門下の研究者に対する総称である。

ボルトンの比較史への関心がよく表れている文章が、『もっと大きなアメリカの叙事詩 *The Epic of Greater America*』である。このなかで、ボルトン

は、南北アメリカ大陸には共通の経験があり、そのなかで各地域の歴史が展開することを強調している。「それぞれのローカルな物語は、(西半球の)他地域に照らし合わせて研究することで、より明確な意味を持つだろう。また、それぞれの国の歴史について書かれたことの多くは、より太い撚糸のなかのひと筋の糸にすぎないのである。」この言葉は、合衆国の歴史を、新大陸各地との比較のなかで理解することや、新大陸という広いコンテキストのなかで考えることで相対化していく必要性を説いたものである [Bolton 1933]。

このような主張の背景には、ボルトン自身がアメリカ合衆国南西部にスペイン支配の影響を読み込んできた学術的態度があろう。しかし、それだけではない。この文章は、もともと 1932 年 12 月のアメリカ歴史学会 (AHA) のトロント大会における会長講演がもとになっている。この大会が AHA 初の国外開催であることや、合衆国以外の出身である会員が増加していることもあって、ボルトンは研究を空間的に拡張していく必要性を説いたのである。さらには、3ヶ月後にフランクリン・ルーズベルトが提唱する善隣外交政策の予兆をここに読み取ることもできよう。そのような合衆国における歴史研究をとりまく時代状況があって、この文章は成立しているのである。

しかし、ボルトンが提唱した比較史は、大きな影響力を持ったとは言えない。ボルトン門下の研究者たちは、合衆国内でスペイン支配の影響が大きい地域、もしくはラテンアメリカの一地域に自らの研究を限定する傾向があり、南北アメリカを見渡すような総合的な比較の視座を提供できなかった [Magnaghi 1998]。加えて、より大きな問題点として、ボルトン学派の姿勢が、自己理解ではなく他者批判へ向かう傾向があったのではないかと指摘するのは安村直己である。ボルトン学派の「西半球歴史学」は、「われわれ」米国史の書き換えの試みではなく、「彼ら」スペイン人による歴史を研究するものと位置づけられ、米国史研究のなかでは傍流に留まってしまう。そして、合衆国に設立されたさまざまな財団の資金援助のもとで、ラテンアメリカの問題解決のための政策科学とも結びついた、というのである [安村 2009: 64]²。それは、鏡に映った似姿から、自分を考え直す、という鏡像史の姿勢とは異なるものである。

けれども、同じ頃から、ラテンアメリカを眺めて、アングロアメリカを見つめ直すという、鏡像史のパイオニアとも呼ぶべき比較の姿勢が、別のところから登場する。南北奴隷制比較論争である。代表的な著作としては、フランク・タンネンバウムの『奴隷と市民 *Slave and Citizen*』（1946年）や、スタンリー・エルキンスの『奴隷制 *Slavery*』（1959年）が挙げられる [Tannenbaum 1946; Elkins 1959]。この論争の詳細やその評価については、高橋均「南北奴隷制比較論再考」に余すところなく論じつくされているので、詳細はそちらに譲り、ここではタンネンバウムの議論の概要を簡潔に記す [高橋 2005]。ブラジルなどのラテンアメリカの奴隷制とアングロアメリカの奴隷制を比較すると、ブラジルでは奴隷に結婚を認めているし、奴隷が自由身分になれる可能性がある一方で、奴隷をより人間的に扱っている。これに対して、米国側では奴隷は完全にモノとみなされ、人権は認められない。しかも、この価値観が奴隷制廃止後も長らく生き残っているために、いつまでもアフリカ系は同等の人間として認められない。われわれは、早急にこの価値観から脱却するべきである。こうして、比較の視線は、現実の合衆国社会に対する社会改革の提言へとつながる。ここには、アメリカ合衆国の奴隷制の特徴を、ブラジルとの比較で炙り出し、それを合衆国の現実問題の解決につなげようとする姿勢が見て取れる。まさに、鏡像史的といってもよいふるまいである。

では、この南北奴隷制比較論争と、21世紀の鏡像史とはなにが異なるのか。本論冒頭に登場したエリオットは、1963年にコロンビア大学でタンネンバウムのセミナーに参加した経験を持つ [エリオット 2017: 187]。彼はタンネンバウムの著作やセミナーが、その後の比較の態度を育んだことを評価しつつも、当時の比較史が総じて抱える問題点として主に3点を指摘している。第1に、コントラストを強調しすぎるため、類似性への目配りが欠けている。第2に、比較する地域を切り離し、別個で独立したものと見なすため、相互の影響や参照性を捨象している。第3に、アングロアメリカやラテンアメリカという単位は、空間的にも時間的にも広がりがあるので、そのまま両地域を比較すれば、比較の精度は著しく低いものになる [Elliott 2006: xvi-xvii]。

この3つの問題点を回避するにはどうすればよいのか。以下では、近年の

鏡像史的研究の取り組み、とくに第1と第2に関わるものについて順番に検討していきたい。第3の点については、とくに独立した節としては扱わず、前二者について検討するなかで、随時言及していく。第3の解決策を予め書いておくと、地域や時代、テーマを絞り込むことや、地理的・時代的な変数、つまりはコンテキストを考慮することが一般的である。

2. 鏡像史①——対比から類似へ

まず、第1のコントラストの問題を取り上げる。近年の研究は、新大陸の各地域を異質なものとして対比的に捉えるよりも、同質や対等なものとして扱い、その共通性に着目する。相手を自分の似姿と捉えるこのような態度を、本論文では鏡像史の1番目の性質とみなしている。

共通性を強調する立場が顕著な研究群としては、奴隷制に関するものが挙げられる。タンネンバウムに連なる研究者たちが対比を強調してきたことを考えれば、その批判的継承として前衛的な比較が登場することはうなずける。ここでは3つの研究を取り上げる。

1番目は、イギリス領とスペイン領の奴隷制の類似性を強調したマイケル・グアスコの『奴隷とイングランド人 *Slaves and Englishmen*』である。この研究は、イングランドが大西洋に進出し始めた時期の奴隷制を検討したものである。明らかになるのは、奴隷が実定法によって規定される以前のイングランドの植民地では、イベリア圏の奴隷制との驚くべき類似性、すなわち自由身分の黒人を認め、混血を暗黙的に受容し、さらにはアフリカ系をキリスト教徒として社会的に包摂する態度が見いだせることである。ところが、イングランド領で商品作物生産と奴隷労働力の結合が確立すると、その奴隷制はイベリア圏との類似性を失い、より明確な人種的境界を備えたものへと変貌していくのである [Guasco 2014]。

奴隷制に共通性を見いだそうとする研究のふたつ目として紹介したいのは、『プランテーション・マシーン *The Plantation Machine*』である。これは、ジャマイカとサン・ドマングという異なる帝国の支配下にある2地域のサトウキビ・プランテーションを比較した研究であり、それぞれの地域を専

門とする2人の研究者による共著である。この研究が異議申し立てをするのは、やはりタンネンバウムに連なる研究者たちの見解、つまり新大陸各地の奴隷制を対比的に捉え、その差異を各帝国の文化や法制度から説明することである。そのために着目するのは、奴隷たちが労働力として投入されるプランテーションの生産体制である。どちらの地域も栽培と精糖という双方のプロセスを併せ持つ包括的で大規模な農場が多く、その産業化された生産プロセス、奴隷労働力の組織化、白人オーナーの利益追求の姿勢、そこから生まれる階級的な同胞意識、いずれの点においても、非常に似通った特徴を持っていた。そこから、帝国という境界線による違いではなく、胚胎する資本主義という共通性によって18世紀後半のカリブ海地域を理解しようとするのが、この共同研究の狙いである [Burnard and Garrigou 2016]。

3つ目に取り上げる研究は、レベッカ・スコットの『自由の度合い *Degrees of Freedom*』である。この研究が比較するのは、19世紀後半のルイジアナとキューバ中部における解放奴隷の扱い方である。明らかになるのは、どちらの地域においても、奴隷からの解放民を包摂するような社会が模索されていたことである。ところが、19世紀末になると、ルイジアナは人種隔離型の社会へと舵を切り、引き続き包摂的な社会が維持されたキューバとは別の道を歩むようになった。したがって、この研究は両地域の類似性を描き出しながらも、それが失われていく過程にも着目している。ここから導き出されるのは、タンネンバウムが焦点化したアングロ圏とイベリア圏のコントラストが、奴隷制が廃止された後の各社会の状況によって成立したのではないか、という考察である [Scott 2005]。

このように、3つの研究はいずれも、タンネンバウムが対比を強調したのに対して、類似性に重心をおいた分析を展開している。類似性を追求するために取られた方法は、比較する時代をずらし、絞り込むことや、空間と時代を限定することであった。時代や空間を限定する姿勢は、エリオットが従来の比較史の第3の問題点として指摘した、分析のユニットが大きすぎるという課題への対処法としても、有効である。

別の比較研究の試みとして取り上げたいのは、ジュリエット・フーカーの『アメリカスにおいて人種を理論化すること *Theorizing Race in the*

Americas』である。この研究が提案するのは、まったく異なる知的伝統に属するとして一緒に検討されてこなかった、アメリカ合衆国のアフリカ系知識人と、ラテンアメリカの知識人の人種言説を、同じ半球という枠組みのなかで考えることである。例えば、アメリカ合衆国のフレデリック・ダグラスの自伝と、アルゼンチンのドミンゴ・ファウスティノ・サルミエントによるファクトドは同じ1845年に出版されているが、まず並べて読まれることはない。しかし、両者の言説があつかう重要なテーマのひとつが、人種をめぐるものであることを考慮するならば、双方はアメリカスという同じ空間で生じた思考と捉えることができる [Hooker 2017]。このように、いままで違いが大きすぎる、あるいはまったく別物であると想定されていたものを、同じ組上に載せる試みは、かなりラディカルだが、類似性を探す比較のひとつの様態だと言えよう。

ここまで取り上げた研究は、奴隷や人種をめぐるものである。しかし、それ以外のテーマについても、類似性に着目した重要な試みがある。代表的なのは、ホルヘ・カニサレス＝エスゲラ『ピューリタンの征服者 *Puritan Conquistadors*』である。同書は、ニュー・イングランド植民地建設に関する言説を検討したものである。言説を支えるのは、キリスト教的な価値や思考である。すなわち、新大陸は悪魔の造った偽りの楽園であり、それを打ち壊して、真なる神の楽園を築くこと、そうした論理によって、イングランドの植民地建設は理論武装されていた。ここで用いられるポキャブラリーは、スペイン人が、アステカの都市などを悪魔の業と断罪し、自らの征服を正当化した際に動員したものと極めて類似している。したがって、両者の植民地化には「重大な類似性があるのだが、大西洋世界を研究するひとびとは、このことにほとんど注目してこなかった」のではないかと [Cañizares-Esguerra 2006: 16]。そうして、カニサレスは、イングランドとカステイーリャを同一の組上で検討する必要性を強調している。

以上、近年の比較研究のなかでも、類似性に着目した研究をいくつか取り上げた。すでに指摘したとおり、こうした研究の背景には、従来の比較が対比を強調してきたことへの反省がある。この反省は、必ずしも学術的な性格にとどまるものではない。『ピューリタンの征服者』の序文において、カニ

サレスは、エクアドル出身である自分の父親の体験について書き記している。父親は、若い頃にアメリカ合衆国で滞在中に朝鮮戦争に従軍した経験を持つ。その後は、メキシコの大学で教鞭をとり、学生運動に加担して職を追われ、エクアドルで血液バンク制度の確立に尽力した。後年になって、その父親が、テキサス大学で教えるカニサレスを訪ねてきた際に、病院で診察を受けたことがある。父親は、退役軍人省の医療を受診できる立場にあった。診療にあたった医師は、父親を、見た目の印象から貧しいヒスパニックであると決めつけ、エクアドルで「未開な (primitive) 暮らしをしているかどうか」質問してきたという [Cañizares-Esguerra 2006: xi]。この挿話から、カニサレスは、どんなに汎アメリカ的な広がりのある活動をする知識人や社会活動家であっても、ヒスパニックと判断されれば、その人の社会的なコンテキストは捨象され、劣った存在と見なされることを指摘する。そういう合衆国の社会に深く根を下ろしている差別的な対比意識、別の言い方をすれば自分たちを例外で特別なものとみなす態度の脱構築を、カニサレスは自らの使命としているのである。

このように、類似性に着目する比較史には、ある社会が抱く自己の歴史的イメージに対して、再検討を促す効用がある。自分を特別だと考えていたのに、同じような似姿がある。そういう発見によって、自己イメージが変化する。それが、鏡像史のひとつのありかたである。

この方向性は、タンネンバウムのように、対比的な比較によって、合衆国の人種差別意識の問題点を指摘し、その修正を促す態度とは異なる。先述のフーカーは、対比的な比較には、序列化が忍び込むのではないかと、いう懸念を表明している。タンネンバウムの場合には、イベリア圏が優り、アングロ圏が劣るという価値判断があった。しかし、カニサレスの父親が経験したように、この対比は、合衆国側を優位におく序列へと反転する可能性もある。フーカー自身は、そのような比較の問題点を念頭に置いて、自らの研究法を、比較ではなく「並置 *juxtaposition*」と表現している [Hooker 2017: 11-17]。この表現を採用するかはともかくとして、近年の研究が、対比ではなく類似を強調する傾向があるのは、この対比的比較の陥穽を意識してのことではなかろうか。

3. 鏡像史②——切断から相互干渉へ

エリオットが指摘する、比較することの第2の問題点に移ろう。つまり、比較するふたつの事柄を切り離して、別個のものとして扱うことである。この問題点は、今しがた言及したフーカーも取り上げている。比較によって区別された個々の対象は、それぞれが均質な性質を備えるまとまりとして、固定化されてしまう。例えば、ブリテン帝国は商業、スペイン帝国は征服、といった二項分割がおこなわれ、それぞれに一枚岩の性格が付与される。この区別は、アプリアリにあるのではなく、比較という振る舞いそのものによって構築されているのではないか。比較は、人種やナショナルな性格、文化的特性といった差異を産出する装置なのではないか。

近年の比較史の試みは、この切断のもたらす弊害への処方箋にもなっている。そのひとつは、区別して比較してきた空間の接続性や一体性に目を向けることである。もうひとつは、この比較意識そのものを歴史化し、相対化していく視線である。このふたつを順番に見ていこう。

(1) もつれあいの歴史学へ

比較が構築した区別と固定化を無効化していくひとつの手がかりは、前節で論じたグアスコやスコットの研究に見いだせる。グアスコは、イングランドが大西洋に進出した最初期の奴隷制に焦点をあてている。その頃のイングランド人たちは、固有の奴隷制の仕組みを持たなかった。彼らは、地中海にあった異教徒の捕虜を奴隷化する慣習や、そこから派生してくる大西洋イベリア世界における奴隷制に接し、それを受容していた [Guasco 2014]。時間の遡行によって、イングランド植民地の奴隷制がけっして不変ではなく、変容しうることが示される。いっぽう、スコットは、南北戦争後の初期のルイジアナに光をあて、解放奴隷の扱いが包摂的になりえたことを示している [Scott 2005]。どちらの研究も、対象とする時代をずらすことで、北米の奴隷制が固定されたものではなく、時とともに変化しうることを見せている。

さらに、このふたつの研究は、奴隷制が変化する背景に、南北アメリカの奴隷制が同じ空間のなかで生起し、相互に関連し、影響し合っていることを

読み取っている。ゲアスコの研究は、イングランドの奴隷制が、地中海・イベリア圏の影響をうけていたこと、すなわちふたつの奴隷制が同じ空間のなかで派生していることを指摘した。いっぽう、スコットは、キューバ独立運動のリーダーのなかに、ニュー・オーリンズでの滞在経験から、運動を軌道修正したものたちがいること、そして彼らの運動がやがて新聞などで報じられ、ニュー・オーリンズ側にも反響を与えたことを記している。そうしてふたつの地域が相互に干渉していることを明示したのである。

比較の対象とみられていた事象が結びつきあって、ほぐしがたいひとつのまとまりを形成していることを指摘した別の研究には、グレッグ・グランディンの『必要の帝国 *The Empire of Necessity*』がある。これは、ハーマン・メルヴィルの中篇小説『ベニート・セレーノ (*Benito Cereno* 邦題「地の涯の海」1855年刊)』の題材となった1805年の事件を扱った研究である。ベニート・セレーノ(スペイン語の発音と表記を尊重すればベニート・セレーニョ *Benito Cerreño*)はスペイン南部出身で南米リマに移住し、そこでトライアル *Tryal* 号を購入した。船名が示すとおり、この船はニュー・イングランドで建造され、クエイカーの密輸商の指揮下で南米太平洋岸を航行していたところ、スペインの軍船に拿捕され、リマで競売にかけられた。セレーニョはこの船で南米太平洋岸の輸送に従事していたが、ある時運搬していた奴隷たちが叛乱をおこし、船を支配下においてしまう。彼らの要求により、船は西アフリカ方面に航海することになったが、チリの沖合で座礁した。この難船を救ったのが、ニュー・イングランド出身のアメイサ・デラーノである。彼は中国で販売するために、激減するアザラシを求めて南太平洋にまで進出していたところ、このトライアル号に遭遇した。デラーノは、この船が反乱奴隷の指揮下にあると気づき、抵抗した奴隷を処刑すると、残りの奴隷をリマで売却した。しかし、そこからリマでは、この売却の正当性をめぐる長期の訴訟が展開していく [Grandin 2014]。ここには、奴隷貿易廃止がはじまり、ハイチが誕生しようとする解放の時代に、奴隷貿易の利益に魅せられたニュー・イングランドやリマの商人たちが、奴隷貿易に加担している姿、そしてスペインとアメリカ合衆国双方の人や司法を巻き込んだ、解きほぐしがたさが、描きだされている。グランディンは、事件のコンテクストを綿密に

検討することをとおして、複雑で分割不可能な南北アメリカの結びつきを如実に示したのである。

比較する対象が、お互いに干渉し合っている点に着目する研究の流れは、英語圏では「もつれた歴史 *entangled history*」と呼ばれることがある。これは、もともとフランスで「交差する歴史 *histoire croisée*」という表現で提案されていた視角の英訳である。大西洋史の分野で、この視角をはじめに大きく取り上げたのは、イリジャ・グールドであろう。「もつれた歴史、もつれた世界 *Entangled Histories, Entangled Worlds*」と題された論文が、これにあたる。冒頭で紹介されるのは、スペイン領フロリダで民兵を統率していた自由身分の黒人が、イングランド船に捕らえられ、ボストンで奴隷として売却するための申請がなされた事例である。そこから、グールドは、ブリテンとスペインを独立した比較可能なものとみなすのではなく、同じ空間に位置し、互いに接続するまとまりとして考えるべきではないか、と提案する。しかも、時代によっては、両者の関係は圧倒的にスペインが優勢であり、ブリテンはスペインの影響下で、その辺境として自らを構築していくことを余儀なくされたのである。そこで、「相互影響」や「互恵的あるいは非対照的な認識」、「お互いを構築しあう絡み合ったプロセス」をその非対称な力学を含めて検討する *entangled histories* が有効となる [Gould 2007]。

グールド以降、この「もつれ」の視点を導入した研究は、大西洋史や南北アメリカ史でも重要性を増している [エリオット 2017: 183-84, 192]。先述のカニサレスなどが編集した『もつれあう帝国 *Entangled Empires*』は、そういう成果のひとつである [Cañizares-Esguerra 2018]。同書のなかには、ガスコによる初期大西洋のブリテン奴隷制の議論や、カニサレスによるイングランド・カルヴァン派の植民地化言説が、スペイン・カトリックに倣ったものだとする論考が収録されている。他には、例えば、クリストファー・シュミット・ノワラのアイルランド系論客に関する文章がある。環大西洋革命の時代、彼らはブリテン型の奴隷制を、スペイン領に導入する役割を果たした。その結果、ブリテン側で奴隷貿易が廃止に向かう時期に、スペイン領キューバなどでは人種境界がより明確で、しかも大規模な奴隷労働力に依拠したプランテーション経済が拡大していく。ここで描き出されるのは、ブリ

テンがスペインの影響下で自らの奴隷制を創出した初期大西洋ではなく、スペインがブリテンの影響下で、奴隷制を再編していった大西洋革命の時代である [Schmidt-Nowara 2018]。

以上のような研究に共通するのは、短い期間ないしは個別の事件に探求を絞るという姿勢である。時間を絞り込むことで、比較対象が同時代の共通の特徴を持ち、同じ空間で生起していることが見えてくる。さらに、事件に焦点を絞れば、そこに絡み合っているコンテクストを読み込むことになるから、ブリテンとスペインという切断は容易ではなくなる。

時間を絞り込み、コンテクストを考慮することは、エリオットが指摘した従来の比較史の第3の問題点、つまり分析の単位が大きすぎるために、比較が漠としたものになることへの対応策にもなっている。エリオット自身は『大西洋世界の帝国 *Empires of the Atlantic World*』のなかで、ブリテンとスペインというふたつの大西洋帝国の成立時期に横たわる時間差について述べている。スペインは16世紀初頭、ブリテンは17世紀初頭に海外進出しているため、その時間差は1世紀におよぶ。その間に、ヨーロッパでは宗教改革が起き、国際政治や経済のバランスも変化し、イングランドでは議会の影響力が強まった。双方の植民地化が、異なる時代環境下で起きていることを考慮すれば、単純な比較は難しい [Elliott 2006: xvii]。

(2) 鏡像意識の歴史学へ

時間差に着目することは、比較史に潜む切断の危険性を回避するいまひとつの道を指し示してくれる。エリオットによれば、この時間差があることによって、イングランドは、スペインというパイオニアを参考にしながら、新大陸へ進出することができた。イングランドの初期の植民地経営が、スペインの征服型植民地を模倣していたことは、明らかである。ところが、17世紀後半になると、スペインを残酷で遅れていると見なし、拒絶することによって、イギリスは商業型植民地のモデルを打ち立てようとする。さらに、18世紀になると、反対にスペイン側が、このイングランド型の商業植民地を目指すようになる [Elliott 2006: xvii]。先行する相手を参照することで、両帝国は模倣と拒絶のフーガを奏でている。そういう視点にたつて、ふたつ

の帝国の絡み合いを、ひとつの曲のように描くことは、短期ではなく長期の歴史を提示することを可能にする。

南北アメリカの歴史的フーガは、シュミット・ノワラによる『ラテンアメリカと大西洋世界における奴隷制、自由、そして廃止運動 *Slavery, Freedom, and Abolition in Latin America and the Atlantic World*』でも展開されている。これは大西洋奴隷制の登場から、19世紀の廃止までの長期を見渡した著作である。もともと大西洋の奴隷制は、地中海圏の末端に位置するイベリア世界で生成したものである。ブリテンやフランスは、このイベリア型奴隷制を模倣しながら、自分たちの奴隷制を構築していった。しかし、17世紀後半に入ると、急速な奴隷増加とプランターの政治的交渉力の強さによって、英仏の奴隷制はより苛酷なものになる。いっぽう、スペインは、勢力拡大する英仏への対抗策として、逃亡奴隷の自由身分化や民兵への組織化などの待遇向上をはかるようになる。ところが、ハイチ革命によりサン・ドマングのプランテーション経済が崩壊すると、キューバ、ブラジルなどでは英仏のプランテーションを模倣した大規模な奴隷制が導入されるようになる [Schmidt-Nowara 2011]。このように、大西洋奴隷制の歴史は、そこに巻き込まれている各地の奴隷制が相互に影響・参照しあう総体として、理解できるのである。

ただし、こうした長期の歴史を総体として描くためには、各時代にそれぞれの態度が変化することを可能にする要因の考察も必要である。はじめは模倣していた対象をやがては拒絶し、そのアンチテーゼとして自らを措定するためには、過去の忘却が前提となる。その一例としては、スペインのフェリペ2世が妻メアリー・チューダーと共にイングランド国王であった頃、征服者間の抗争で統治不能となったペルーを、両国が協力して再征服する計画が挙げられる。そのために、フェリペ2世の臣下でペルーに詳しい人物たちが、ロンドンで情報提供をおこない、イングランドがペルーでカソリック的統治を確立することを推奨するリチャード・エデンの著作も発表された。しかし、エリザベス1世が即位すると、そういう協力関係は忘却され、プロテスタントとカソリックという対立軸のなかで、ウォルター・ローリーの新大陸植民計画が立ち上がるのである [Heaney 2018]。

忘却されたつながりや参照を掘り起こす作業は、比較の態度を歴史的に検討することを要請する。つまり、当時のひとびとが何を比較し、そこからどんな対比や模倣を導きだしていたのか、といったことである。ブリテンが17世紀後半に自らを商業の帝国と定義するためには、スペイン帝国の片隅にいた自らを忘却するだけでなく、スペイン帝国を征服型と評価し、その対比によって、自らを性格づける姿勢がなければならない。鏡像史のもうひとつの方向性は、この鏡の歴史的な働きを検討することである。

シュミット・ノワラやエリオットの著作は、イベリア圏とアングロ圏が互いに抱いていた比較意識の変遷を、長期的に分析したものだといえる。いっぽうで、ある特定の時代や地域に絞って、その鏡像意識を問うことも可能である。前節で取り上げたレベッカ・スコットの研究は、ルイジアナとキューバがお互いを参照し、自らと比較していたことを、19世紀後半に限定して示したといえる。

より短期間の比較意識を検討したものが、アダ・フェレルの『自由の鏡 *Freedom's Mirror*』である。これは、キューバの農場主や奴隷たちがハイチ革命に対して見せた反応を描いたものである。革命期、キューバの農場主たちは、競争相手である隣島サン・ドマングの砂糖生産が減少することを期待して、反乱する奴隷たちを応援していた。そして、自分たちの農場生産を拡大すべく、より多くの奴隷労働力を輸入した。ところが、ハイチが独立すると、自分たちの抱える奴隷たちが解放を求めることを恐れ、その抑圧に心を砕くようになる。いっぽう、キューバの奴隷たちは、隣の島の自由な黒人に思いを馳せ、別様の自分たちを想像するようになり、それが彼らの反乱などの行動につながっていく。隣の島の状況と比較しながら、自分たちのあり方を定義し、想像していくこと、それがキューバに生きる人々の心的世界であった [Ferrer 2014]。

先に取り上げたフーカーは、19世紀中葉のアルゼンチンのサルミエントと合衆国のダグラスを並置して検討するにあたって、この比較意識の歴史的機能を俎上に乗せている。サルミエントは合衆国での滞在経験に基づいて、自らの人種をめぐる思考を紡ぎ出した。いっぽう、ダグラスが参照するのは、カリブ海や中米の人種的な民主主義である。いずれの場合でも、アメリ

カの別の地域に見いだした人種関係のあり方が、「その時々においてアンチテーゼ、好例、モデルや希求する対象として機能し」、そこから翻って自分の地域の人種がどうあるべきか、という思考を展開しているのである。これは、まさに鏡像史的なふるまいである [Hooker 2017: 3]。

同様に、19世紀前半のアメリカ合衆国の知識人たちが、スペイン語圏を参照しながら合衆国のアイデンティティを構築していたことを示したのが、イバン・ヤクシッチの『ヒスパニック世界とアメリカの知的生活, 1820-1880年 *The Hispanic World and American Intellectual Life, 1820-1880*』である。19世紀のニュー・イングランドには、ヘンリー・ワズワース・ロングフェロー Henry Wadsworth Longfellow、ワシントン・アーヴィング Washington Irving、ウィリアム・プレスコット William Prescott、ソフィア・ピーボディ Sophia Peabody、メアリー・ピーボディ・マン Mary Peabody Mann といったスペイン語圏に関心を持つ知識人サークルがあった。彼らは、スペインやイベロアメリカに滞在し、その知識人とも幅広く交流した。さらに、イベリア世界の歴史や文献学研究を推進し、アメリカ合衆国におけるヒスパニック研究の基礎をつくった。ヒスパニック研究への関心の背景には、合衆国の歴史にコロンブスに始まるスペインの影響を認める視線がある。やがて、このヒスパニック研究は、スペインを宗教的に不寛容で、専制的だとステレオタイプ化し、それを反面教師として、アメリカ合衆国のあるべき姿を提示するようになる。ヤクシッチはそういう特徴づけが、後々まで続くヒスパニックに対する差別意識を醸成したことを認めつつも、このサークルの人々がいかにイベリア世界の文化を愛し、熱心に吸収しようとしていたかを分厚く描いてみせる [Jaksić 2007]。そういう情熱の忘却があっけはじめて、カニサレスの父親が経験した蔑視は成立しているのである。こうしてみると、比較意識の歴史化は、現代の南北アメリカに生きる人々の日常的な鏡像実践を相対化していく作業へとつながっているのである。

おわりに

冒頭で紹介した、イングランドがもし最初に新大陸を発見していたら、

というエリオットの問いに戻ろう。過去に対してそのような問いを發することには、どんな意味があるのだろうか。ここまで検討してきたとおり、南北アメリカに生きる人々は、鏡をながめながら、もし自分が向こう側のものであれば、と自問してきた。それは、スペインの新大陸進出を眺めるイングランドの人々の羨望の視線であるし、独立したハイチと同等の自由を渴望するキューバの奴隷たちの気持ちであるし、壁の向こう側の合衆国へ行くことを夢見る現代のドリーマーたちの願いでもある。少なくとも、われわれはそういう比べる意識を無視して、南北アメリカ世界を理解することはできない。鏡像史と表現してみた新しい比較史の試みが指し示すのは、この仮想現実の働きを歴史的に検討することの重要性だとも言える。

ただし、この反事実の想像力が、対比的であることにも注意する必要がある。新しい比較が注意深く回避しようとしたのは、まさにこの対比を強調しすぎる姿勢であった。過去の比較態度が対比に取り憑かれていたことは確かであろう。したがって、比較意識の歴史的探求も対比に偏る傾向があるのは、やむを得ないかも知れない。

では、対比でない比較意識を歴史的に読み込んでいくことは可能だろうか。それは、鏡像史の第1の特徴である、類似性を強調する視線にほかならない。大西洋進出初期のイングランドがイベリア圏の奴隷制を模倣したように、忘却された模倣意識を掘り起こしていく方向性はありうるだろう。そのためには、カニサレスによれば、国境などの分割線によって断片化されたアーカイブを連結し、横断していく姿勢が必要である [Cañizares-Esguerra 2018: 5]。そういう根気強い作業の先に、何処も同じアメリカという想像力の働きを、歴史的に描くことは可能になるだろう。

もちろん、こちら側も向こう側も同じという意識は、必ずしも前向きなものではない。トライアル号事件を通じてグランディンが描き出したのは、解放の時代にも関わらず、ニュー・イングランド人であろうが、スペイン人であろうが、フランス人であろうが、奴隷たちを抑圧し、ものとして扱おうとする共通の姿勢を持っていたことである。奴隷たちが抱いたであろう、何処も同じという深い失望を描き出すことも、この同胞意識の追求に課せられた使命である。

そういう課題を含めて、鏡像史にはまだまだやるべきことは残されているのである。

註

- ¹ この論文は、2018年2月23日に立教大学アメリカ研究所で開催された研究会での報告がもとになっている。報告際にはさまざまな指摘をいただいた。この場を借りて、謝意を表したい。指摘のなかには、この論文に反映できたものと、そうでないものがある。反映できなかったものに関しては、別のかたちで答えていきたい。
- ² この論考にボルトンに関する議論があることを、著者自身からご教示いただいた。記して謝意を表したい。

参考文献

- Bolton, Herbert E. 1933. *The Epic of Greater America*. Berkeley: University of California Press.
- Burnard, Trevor and John Garrigus. 2016. *The Plantation Machine: Atlantic Capitalism in French Saint-Domingue and British Jamaica*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Cañizares-Esguerra, Jorge. 2006. *Puritan Conquistadors: Iberianizing the Atlantic, 1550-1700*. Stanford: Stanford University Press.
- . ed. 2018. *Entangled Empires: The Anglo-Iberian Atlantic, 1500-1830*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Elkins, Stanley. 1959. *Slavery: A Problem in American Institutional and Intellectual Life*. Chicago: University of Chicago Press.
- Elliott, John H. 2006. *Empires of the Atlantic World: Britain and Spain in America, 1492-1830*. New Haven: Yale University Press.
- . 2009. "Atlantic History: A Circumnavigation." In *The British Atlantic World, 1500-1800*, edited by David Armitage and Michael J. Braddick (2nd ed., 2002 1st ed.), 253-270. New York: Palgrave.
- Ferguson, Niall. 2000. *Virtual History: Alternatives and Counterfactuals* (New Edition). New York: Basic Book.
- Fernández-Armesto, Felipe. 2003. *The Americas: A Hemispheric History*. New York: Penguin Books.
- Ferrer, Ada. 2014. *Freedom's Mirror: Cuba and Haiti in the Age of Revolution*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gould, Eliga H. 2007. "Entangled Histories, Entangled Worlds: The English-Speaking Atlantic as a Spanish Periphery." *American Historical Review* 112 (June): 764-786.

- Grandin, Greg. 2014. *The Empire of Necessity: Slavery, Freedom, and Deception in the New World*. New York: Metropolitan Books.
- Guasco, Michael. 2014. *Slaves and Englishmen: Human Bondage in the Early Modern Atlantic World*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Heaney, Christopher. 2018. "Marrying Utopia: Mary and Philip, Richard Eden, and the English Alchemy of Spanish Peru." In *Entangled Empires: The Anglo-Iberian Atlantic, 1500-1830*, edited by Jorge Cañizares-Esguerra, 85-104. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Hooker, Juliet. 2017. *Theorizing Race in the Americas: Douglass, Sarmiento, Du Bois, and Vasconcelos*. New York: Oxford University Press.
- Jaksić, Iván. 2007. *The Hispanic World and American Intellectual Life, 1820-1880*. New York: Palgrave.
- Magnaghi, Russell M. 1998. *Herbert E. Bolton and the Historiography of the Americas*. Westport: Greenwood Press.
- Schmidt-Nowara, Christopher. 2011. *Slavery, Freedom, and Abolition in Latin America and the Atlantic World*. Albuquerque: University of New Mexico Press.
- . 2018. "Entangled Irishman: George Dawson Flinter and Anglo-Spanish Imperial Rivalry." In *Entangled Empires: The Anglo-Iberian Atlantic, 1500-1830*, edited by Jorge Cañizares-Esguerra, 124-141. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Scott, Rebecca J. 2005. *Degrees of Freedom: Louisiana and Cuba after Slavery*. Cambridge: Harvard University Press.
- Tannenbaum, Frank. 1946. *Slave and Citizen: The Negro in the Americas*. New York: A. A. Knopf.
- エリオット, J. H. 2017. 『歴史ができるまで——トランスナショナル・ヒストリーの方法』立石博高・竹下和亮訳, 岩波書店.
- グールド, イリジャ・H. 2016. 『アメリカ帝国の胎動』森丈夫監訳, 彩流社.
- 高橋均. 2005. 「南北奴隷制比較論再考」『アメリカ史研究』第28号: 5-22頁.
- 安村直己. 2009. 「フンボルトから『アラモ』まで——ラテンアメリカをめぐる歴史実践の系譜と新自由主義」『青山史学』第27号: 57-74頁.